

# 血液型ステレオタイプの構造と機能<sup>1)</sup>

松 井 豊<sup>2)</sup>  
上 瀬 由美子<sup>3)</sup>

### **Functions and Structure of Blood-group Stereotype** \_\_\_\_\_

The purposes of this study are to investigate the usage and the function of the blood-group stereotype widespread in Japan, to clarify the contents of the stereotype and the negative feeling for each group member, and to assort the affirmative or negative reasons for the stereotype.

Three hundred and eighteen female undergraduate students (average age 20.1) responded to the questionnaire about the blood-group stereotype. The main results showed the following findings. Blood-group stereotype is used for amusements, to facilitate relations with others, as guidance of one's behavior. Contents of the stereotype differ among blood-types, and some of the students have negative feelings for members of the AB blood-group. In each case, the basis of either their affirmation or denial of the stereotype, the basis comes from their individual experiences or logical inference.

ABO 式の血液型によって人の性格が異なるという信念は、現代の日本人に広く普及している。この信念は古川 (1927) の研究に端を発するが、1984年をピークとした近年の血液型ブームは、1974年の能見正比古の著書「血液型でわかる相性」に始まっている。毎日新聞社が1984年に成人男女2,320人を対象として行った世論調査の結果によれば、日本人成人の6割以上が、血液型と性格との間に何らかの関連があると考えている (総理府, 1985)。心理学の分野においても近年、血液型と性格の関連を検証する研究が行われるようになった (大村, 1990; 白佐・井口, 1993など)。しかし一般の信念とは逆に、血液型と性格の関連を否定する研究結果が続いて発表されている。例えば松井 (1991) は、JNN データバンクによる4回のランダムサンプリング調査を再解析し、延べ11,766人の血液型と性格の関連を検討している。その結果、24の性格項目において、一貫した方向で血液型による差のみられたものはひとつもなく、松井は血液型と性格の関連を否定している。以上のような研究結果から、現在のところ血液型と性格の関連は「全体として妥当なものである可能性はあまりない。少なくとも実用に役立つほどの大きな関係はありそうもない」(白佐・井口, 1993) と考えられている。

しかし、妥当性がないにもかかわらず、なぜ血液型と性格が関連あると信じられているのか。詫摩・松井 (1985) は ABO 式血液型と性格が関連あるという信念を「血液型ステレオタイプ」と命名し、血液型ステレオタイプを持つ人は持たない人に比べて、回帰性傾向、社会的外向性、親和欲求が高いことを明らかにしている。この結果について彼らは、このような性格傾向の強い者は人との交際が多いために、血液型ステレオタイプの話題を人付き合いの潤滑油として用いているためと解釈している。また、上瀬・松井・古沢 (1991) も、血液型ステレオタイプの強さと社会的外向性との間に有意な相関があるという、詫摩らを支持する調査結果を提出して

いる。以上の研究結果から、血液型ステレオタイプは対人関係を円滑に進めるための“対人方略”として機能していると推測される。このため、妥当性の低さに拘わらず血液型ステレオタイプが保持されているものと考えられる。

一方、血液型と性格をめぐる問題に関しては、このステレオタイプが社会的差別につながるという指摘を無視することができない。雑誌記事で紹介されたように（梅村、1990）、企業の人事配置に血液型を用いることは、特定の血液型に属する人々に対する差別的行動と言わざるを得ない。しかし、一般的な意見として、「血液型性格判断は遊びであり、実際に他者判断に用いられることは少ないのではないか」との指摘も存在している。これらの指摘には実証的な検討が加えられておらず、血液型ステレオタイプの果たす役割に関する研究は不十分な段階にとどまっている。

そこで本研究では、血液型ステレオタイプが実際にどのように用いられ、どのような機能をもっているのかを確認することを第1の目的とする。

第2に、各血液型に対していだかれているイメージを分析する。詫摩・松井（1985）は、各血液型に抱かれているステレオタイプの内容を検討している。彼らは血液型ブームの火付け役となった能見正比古の著書を参考にし、各血液型に典型的と考えられている性格特性を抜きだした。これらの項目について、大学生を対象とし、「A型」「O型」それぞれのイメージにあてはまると考えられる項目に○をつけることを求めたが、回答者が一致して「あてはまる」に回答した項目はみられなかった。この結果から詫摩らは、各血液型のイメージは実際には明確ではないと結論している。これに対し佐藤・渡邊（1992）は、血液型ステレオタイプの内容は、もはや能見や古川のものとは離れ、それぞれの血液型について核になる特性が存在し、それを中心に全体の内容が形成されていると指摘している。ただし、彼らの指摘は回答者の自由記述を分類する形の分析結果に基づいているため、数量的・客観的検討が不十分と考えられる。一方、坂元（1988）は、各血液型のイメージを性格に関する20の形容詞を用いて検討している。そ

の結果に基づき坂元 (1991) は、血液型ステレオタイプの構造を、内向-外向・協調性-非協調性の2軸から成るものとして考察している。すなわち各血液型の性格は、A型が「内向的で協調的」、B型が「外向的で非協調的」、O型が「外向的で協調的」、AB型が「内向的で非協調的」とイメージされていることを指摘している。ただし、坂元が用いた性格項目は、能見の記述との対応が明確ではない。

そこで本研究では、改めて、各血液型についてどのようなイメージが構成されているのかを確認することを第2の目的とする。

第3に、現在ステレオタイプ研究は認知心理学におけるスキーマ概念の影響を受け、ステレオタイプをひとつの認知的スキーマとしてとらえる方向に進んでいる(池田・村田, 1991など)。血液型ステレオタイプについても、坂元(1991)をはじめとして、認知的側面に焦点を当てた研究が多い。これらの研究では、従来の態度研究で扱われてきた感情的側面や行動的側面については、十分な検討が行われているといい難い。しかし、血液型ステレオタイプのような社会行動に直結した問題においては、認知的側面だけでその全体像を捉えることは難しく、感情的な要素が大きく関わっていると予測される。例えば、ある人物を批判する際に、血液型ステレオタイプに基づく性格を理由として挙げるような場合、ステレオタイプは否定的感情と強固に結び付いているであろう。また、血液型ステレオタイプの中に特定の血液型に対する否定的イメージが存在し、否定的感情が伴う場合があるならば、先に触れた差別にもつながることが懸念される。さらに、従来のステレオタイプ研究では、少数派の成員に否定的ステレオタイプが形成されやすい理由のひとつとして、「誤った関連づけ (illusory correlation)」が挙げられている。もし、A型(日本人の4割)に比べAB型(日本人の1割)に否定的感情がもたれる傾向があるなら、血液型ステレオタイプにおいても、まさに少数者であるが故の差別が生じている可能性がある。そこで本研究では、血液型ステレオタイプを感情側面からも検討することを第3の目的とする。

第4に、上瀬・松井・古澤(1991)は血液型ステレオタイプを信じる(信じない)理由の自由記述回答を分類し、それが“経験的理由”“論理的理由”に大別されることを明らかにした。経験的理由とは“自分が当たっている(いない)”“周りの人が当たっている(いない)”など自己の経験を根拠としているものである。一方、論理的理由とは、“血液の成分が異なることによって性格にもなんらかの影響を及ぼしているはず”“人間の性格は複雑であり4タイプには分けられない”など論理的な理由づけを根拠とするものである。ただし、上瀬らの研究は自由記述を分類した形であったため、数量的・客観的検討が不十分であり、またこれらの理由づけが実際にどの程度なされているかについても検討されていない。そこで本研究では、血液型ステレオタイプを肯定・否定する理由が、それぞれ経験的・論理的根拠に分類できることを数量的に確認する。

以上の4つの目的にそって、本研究では質問紙法による意識調査を行う。調査対象者は、血液型ステレオタイプを強く形成していることが予測される女子大学生とした。

## [方法]

本研究は、1991年5月～6月にかけて大学内の教室において質問紙を用いた集合調査形式で行われた。被験者は聖心女子大学・日本女子大学の女子学生318名(平均年齢20.1歳)である。

### 質問紙構成

質問紙には性・年齢・ABO式の血液型に関する質問の他に、以下の質問項目が含まれている。

#### 1. 血液型ステレオタイプの有無に関する項目

「血液型によって性格は異なると思いますか」との質問に対し、「非常に異なる」から「全く関係ない」の5段階評定で回答を求めた。

## 2. 血液型ステレオタイプへの態度に関する項目

### ①血液型ステレオタイプへの態度に関する項目

“血液型性格判断は人を理解するのに役立つ”など血液型ステレオタイプに関する項目を13項目作成し、「そう思う」「ややそう思う」「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「そう思わない」の5段階評定で回答を求めた（項目の例についてはTable 1を参照）。

### ②各血液型のイメージに関する項目

血液型によって性格が異なると回答した者に「各血液型の人はそのような性格だと思いますか」との質問で、“考え方がストレートである”など性格を記述した20項目について、各項目についてあてはまる血液型すべてに○をつけ、該当がない場合には「あてはまるものはない」に○をつけることを求めた。この20項目は、詫摩・松井（1985）において、各血液型のステレオタイプの内容を検討する際に用いられた項目である（項目の例についてはFigure 1を参照）。

### ③社会的距離に関する項目

Bogardus（1925）の社会的距離尺度を渋谷（1985）が訳したものを参考に、本研究で独自に4項目を設定した（「隣には住みたくないタイプの性格」「結婚したくないタイプの性格」「仲間として一緒にクラブに入りたくないタイプの性格」「自分には好きになれないタイプの性格」）。回答は多肢選択法で、各項目についてあてはまる血液型全てに○をつけ、該当がない場合には「あてはまるものはない」に○をつけることを求めた。

### ④否定的感情に関する項目

「A型の人々の性格はきらいだ」「B型の人々の性格はきらいだ」「O型の人々の性格はきらいだ」「AB型の人々の性格はきらいだ」の4つの項目について①と同じ5段階評定で回答を求めた。

## 3. 血液型ステレオタイプを信じる（信じない）理由づけ

上瀬ら（1991）の研究結果を基に、血液型ステレオタイプを肯定・否定する理由に関する項目を12項目作成した。回答は2.①と同じ5段

階評定で求めた（項目内容は Table 4 を参照）。

## [結果]

### 血液型ステレオタイプへの態度

血液型ステレオタイプへの態度項目の回答について、「そう思う」「ややそう思う」を併せたものを“肯定率”とし、その割合を検討した (Table 1)。

その結果、「血液型性格判断は楽しい」の肯定率が74%と最も高く、「血液型性格判断は当たっている」(58%)、「血液型性格判断に関する特集や記事をよく読む」(56%) がそれに続いている。回答者にとって血液型性格判断が身近な存在であり、楽しまれている様子が示されている。

逆に、「人に接する時、相手の血液型性格判断を考えてから行動する時がある」「相手の血液型性格判断によって、接し方を変える時がある」など、実際に行動指針として用いている者は1割程度にとどまっている。

これらの回答について因子分析（主成分分解・Varimax 回転）を行った結果、固有値1.0以上の基準を満たす4因子が抽出された (Table 1)。第1因子は「血液型によって人の性格は異なると思う」など血液型ステレオタイプの強さを示す項目に負荷量が高く、「信念強度」と命名された。第2因子は「相手の血液型によって、接し方を変えることがある」など、対人場面においてステレオタイプを利用する程度に関する項目に負荷量が高く、「行動調整」と命名された。第3因子は、「血液型性格判断は楽しい」など楽しさを示す項目に負荷量が高く、「娯楽」と命名された。第4因子は、「血液型性格判断は友人や家族等のコミュニケーションに役立つ」など、対人関係の潤滑油としての役割を示す項目に負荷量が高かった。そこで、「関係促進」と解釈された。このうち「娯楽」「関係促進」の因子は血液型ステレオタイプの機能を示すものと考えられる。また、この4因子による累積寄与率は72%であった。



Table 1 血液型ステレオタイプに対する態度の因子分析（バリマックス回転後の負荷量）

変数名	肯定率 (%) <sup>*1</sup>	ステレオタイプ の強さ	行動調整	娯楽	関係促進
血液型によって性格は異なる <sup>*2</sup>		○ -0.810	-0.172	-0.162	0.051
血液型性格判断は信用できる	45.3	○ 0.849	0.173	0.151	-0.102
血液型性格判断は当たっている	57.9	○ 0.822	0.143	0.239	-0.062
血液型性格判断は楽しい	73.9	○ 0.291	-0.017	○ 0.732	-0.243
血液型性格判断の話をするのが好きである	52.8	○ 0.305	0.102	○ 0.774	-0.250
血液型性格判断は友人や家族などのコミュニケーションに役立つ	57.6	○ 0.135	0.203	○ 0.216	○ -0.815
血液型性格判断は人を理解するのに役立つ	26.3	○ 0.510	0.328	○ 0.116	○ -0.619
初対面の人との話題に、血液型の話は便利だ	46.8	-0.221	0.117	0.498	○ -0.599
人に接する時、相手の血液型を考えてから行動する時がある	9.7	○ 0.162	○ 0.875	0.054	-0.175
相手の血液型によって、接し方を変える時がある	10.1	○ 0.172	○ 0.892	0.021	-0.145
なぜ相手がそのような行動をしたか考える時に、血液型は理解の手がかりになる	24.6	○ 0.332	○ 0.626	0.077	-0.353
相手の血液型を聞くと、自分の血液型との相性をまず考える	30.2	○ 0.083	○ 0.653	0.470	0.072
血液型性格判断に関する特集や記事をよく読む	56.2	○ 0.276	0.156	○ 0.731	-0.094
血液型性格判断は自分を知る手がかりになる	21.3	○ 0.632	0.270	0.327	-0.152
寄与率 (%)		22.9	19.5	17.3	12.6

注：\*1 肯定率は、その項目に「そう思う」「ややそう思う」と回答した者の割合。

\*2 逆転項目。この項目については、「非常に異なる0.3%」「かなり異なる21.1%」「やや異なる56.6%」「あまり異なるなら13.8%」「全く関係ない8.2%」であった。

○印の付いた因子の尺度項目とした。

## 各血液型のイメージ

性格特性を記述した20項目について、当てはまると回答された血液型の割合は Figure 1 に示す結果となった。A型は比較的イメージが明確であるが、その他の血液型は別の血液型との差が明確ではない。

さらに、各イメージと各血液型がどのように関連しているのかを検討するために、双対尺度法を用いて分析を行った。分析に当たっては、20の特性項目をX値、4つの血液型をY値として解析を行った。各軸に対するスコアをXとY同時に平面上にプロットした結果、Figure 2 に示すようになった。各軸の寄与率は、第1軸が32.3%、第2軸が13.8%である。

各項目の布置をみると、全体としては4つの血液型によって、性格特性が異なって捉えられていることが示されている。ただし、A型の周りには項目が比較的まとまっているのに対し、その他の血液型では血液型と性格との結び付きが明確ではなく、特にAB型は項目との間に距離がある。この点から、A型に比べてAB型のイメージは明確ではないと考えられる。

また、各血液型と距離の近い特性項目を検討すると、A型では「周囲の人に気をつかう」「感情や欲求をおさえる方である」といった項目との距離が近い。従って、これらの特性がA型の特徴としてイメージされていると考えられる。Figure 2 において各項目に付帯している血液型名は、能見の著書においてその特性が当該の血液型に特徴的であると記述されていたことを示している。A型に接近している先の性格項目は、いずれも能見の記述においてもA型の特性として位置づけられていたものである。一方B型では、「物事に没頭できず根気がない」「人に縛られるのが嫌い」「考え方がストレート」などの項目との距離が近く、これらの特性がB型のイメージの中心となっている。このうち「物事に没頭できず根気がない」は能見においてB型の特徴とされているものの、その他の2項目はAB型の特性と記述されていたものである。続いてO型では、「人への対応はニコヤカでソツがない」「人に心を開く」「未来に対して楽観的」が近い項目となっている。ただし、後者2項目はB型の特性と記述されていたものである。

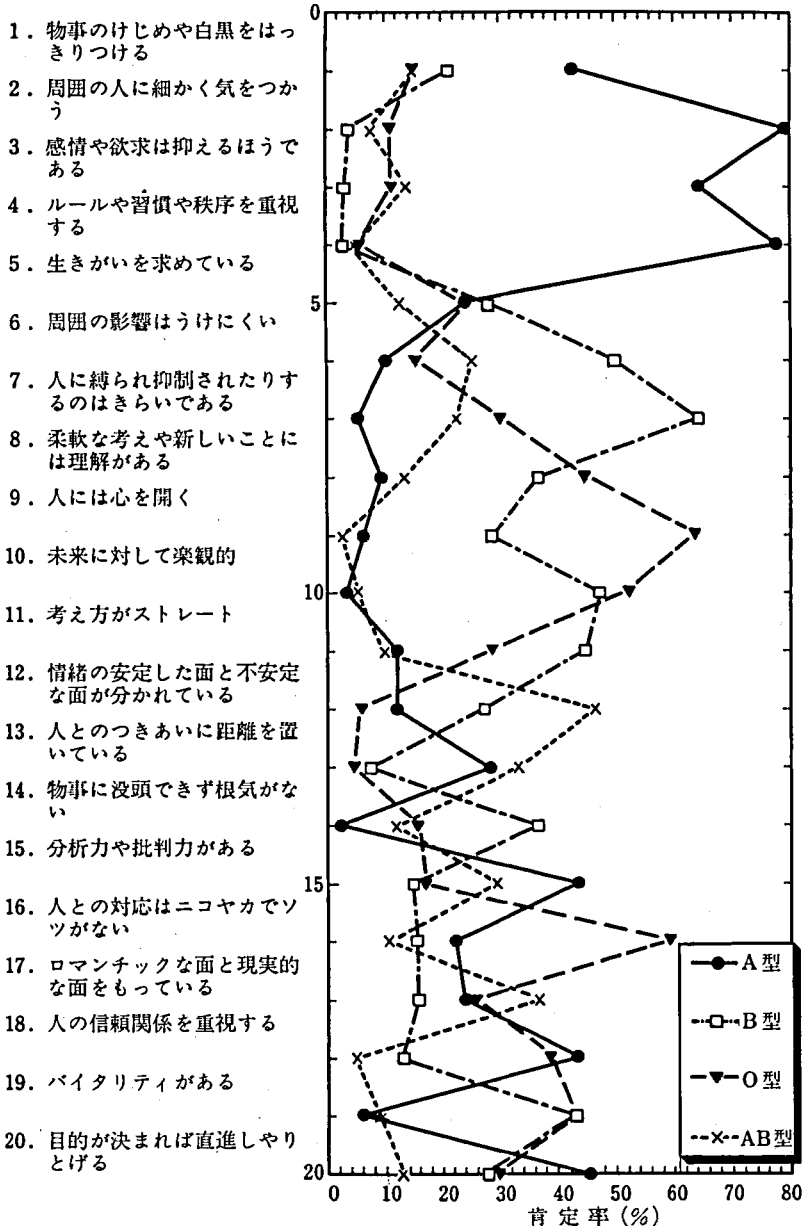


Figure 1 各血液型に対するイメージ

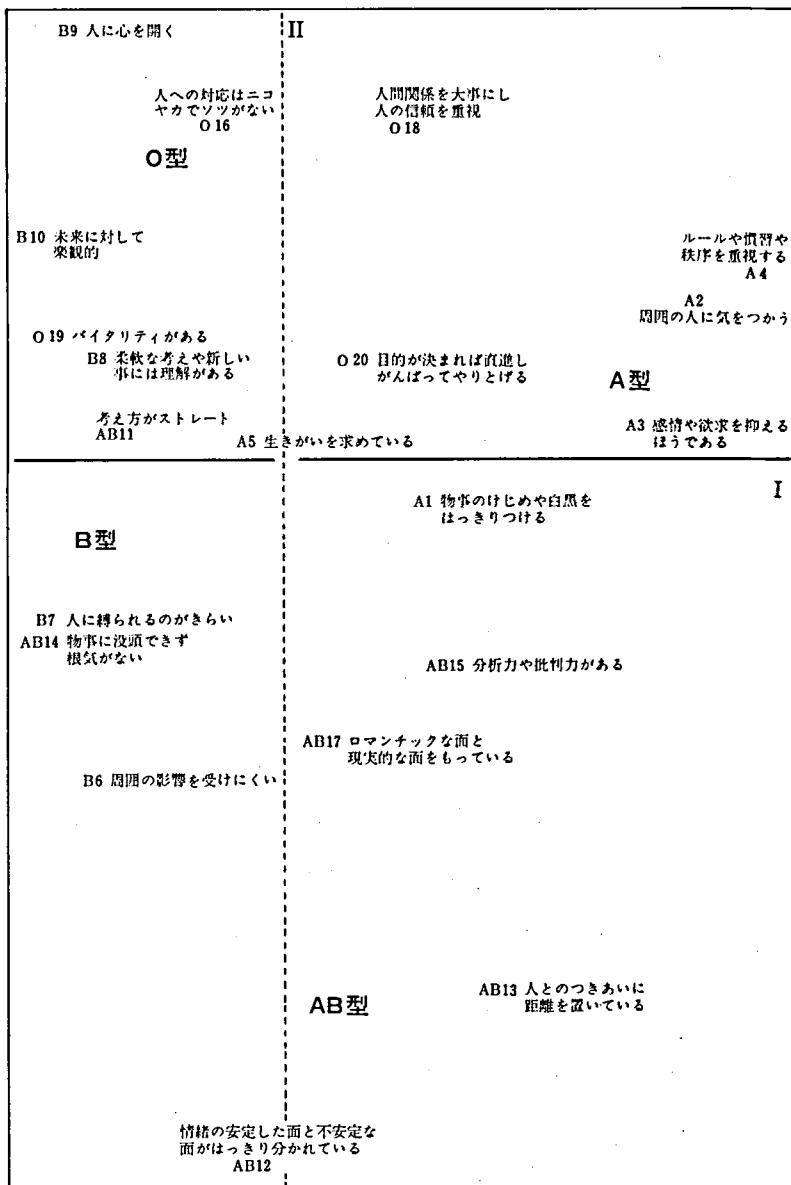


Figure 2 血液型イメージの双対尺度による分析結果

また「バイタリティがある」「柔軟な考えや新しいことには理解がある」といった項目は、B型とO型との中間に位置しており、両者に共通して抱かれているイメージであるといえる。最後にA B型では、「情緒の安定した面と不安定な面がはっきりと分かれている」「人とのつきあいに距離をおいている」などがイメージの中心となっている。両項目は、能見においてもA B型の特徴として記述されたものである。

## 血液型ステレオタイプの感情的側面

### 1. 社会的距離に関する項目

本研究で独自に作成した社会的距離に関する4項目の回答結果は、Table 2に示すようになった。Table 2は、4項目それぞれにおいて、各血液型が「あてはまる」とされた割合を示している。各回答について、A・B・O・A Bの間に差があるか一様性の検定を行った。その結果「隣には住みたくないタイプ ( $\chi^2=72.02$   $df=3$   $P<.01$ )」「仲間として、一緒のクラブに入りたくないタイプ ( $\chi^2=27.36$   $df=3$   $P<.01$ )」「結婚したくないタイプ ( $\chi^2=60.68$   $df=3$   $P<.01$ )」「自分には好きになれないタイプ ( $\chi^2=33.62$   $df=3$   $P<.01$ )」と、4ついずれにおいても有意な差がみられた。各項目とも、A B型に対する肯定率が高く、特に「隣には住みたくない」「結婚したくない」の2項目については、全体の2割以上がA B型の人間にあてはまると考えている。

また、回答者の血液型によって否定的イメージが異なることを予測し、回答者の血液型別に社会的距離項目の回答を集計した (Table 2)。4項目全体を通して、A型に対するイメージが、回答者の血液型によって有意に異なっていた。いずれも、A型回答者は自分の血液型に対して否定的イメージを持つ割合が低く、B型の回答者は逆にA型に対し否定的イメージを強く持っていた。

Table 2 各血液型に対する社会的距離項目の肯定率

		回答者の血液別にみた回答結果					
	N	全体 311	A型 109	B型 79	O型 98	AB型 25	カイ自乗 検定結果
1. 隣には住みたくないタイプ (%)							
該当する血液型	A	6.1	1.8	13.9	5.1	4.0	**
	B	17.7	21.0	10.1	18.4	24.0	
	O	1.9	0.0	6.3	1.0	0.0	*
	AB	20.3	19.3	25.3	20.4	8.0	
	なし	50.8	52.3	46.8	53.1	48.0	
	無回答	10.0	10.1	10.1	8.2	16.0	
2. 仲間として、一緒にのクラブに入りたくないタイプ (%)							
該当する血液型	A	6.1	3.7	12.7	4.1	4.0	*
	B	9.6	14.7	6.3	6.1	12.0	
	O	2.3	0.9	3.8	1.0	8.0	
	AB	12.9	11.9	15.2	14.3	4.0	
	なし	63.3	65.1	58.2	68.4	52.0	
	無回答	9.6	8.3	10.1	8.2	20.0	
3. 結婚したくないタイプ (%)							
該当する血液型	A	10.3	2.8	22.8	7.1	16.0	**
	B	11.6	17.4	5.1	9.2	16.0	*
	O	2.6	1.8	5.1	1.0	4.0	
	AB	22.5	22.0	24.1	25.5	8.0	
	なし	50.5	55.0	43.0	54.1	40.0	
	無回答	9.0	8.3	8.9	8.2	16.0	
4. 自分には好きになれないタイプ (%)							
該当する血液型	A	5.5	2.8	13.9	2.0	4.0	**
	B	11.9	17.4	6.3	10.2	12.0	
	O	2.3	1.8	5.1	0.0	4.0	
	AB	13.2	11.9	15.2	14.3	8.0	
	なし	60.6	62.0	54.4	66.3	52.0	
	無回答	10.3	9.3	10.1	9.2	20.0	

注：肯定率は、1～4の項目に対し「あてはまる」と回答した者の割合を示している。  
 全体の分析では、血液型の無記入者22人を除く。

\*\*P<.01, \*P<.05

Table 3 各血液型に対する否定的感情の肯定率

	全体	回答者の血液型別の肯定率と検定結果			
		A型	B型	O型	AB型
N	309	108	78	98	25
A型の性格はきらいだ (%)	9.1 $\chi^2=16.201$ n.s.	8.4	16.7	4.1	8.0
N	310	108	79	98	25
B型の性格はきらいだ (%)	9.0 $\chi^2=13.587$ n.s.	12.1	8.8	6.1	8.0
N	310	108	79	98	25
O型の性格はきらいだ (%)	2.3 $\chi^2=16.845$ n.s.	2.8	3.8	1.0	0.0
N	310	108	79	98	25
AB型の性格はきらいだ (%)	10.3 $\chi^2=17.176$ n.s.	11.1	12.7	9.1	4.0

注：肯定率は、各問に対し「そう思う」「ややそう思う」と回答した者の割合を示している。  
 全体の分析では、血液型の無記入者22人を除く。

## 2. 否定的感情に関する項目

「～型の人性格はきらいだ」の形式で、4つの血液型に対する否定的感情を尋ねた結果を Table 3 に示す。Table 3 の数値は、「あてはまる」「ややあてはまる」を併せた数値で、否定的感情を持っている者の割合を示している。これをみると、O型が2%と最も低く、A型(9%)・B型(9%)・AB型(10%)は1割程度で並んでいる。この割合について、A・B・O・ABの間の一様性の検定を行った。その結果、 $\chi^2=17.51$  (df=3  $P<.01$ ) で、有意な差が見られた。

社会的距離項目と同様に、回答者の血液型によって回答に差がみられるかを検討した結果、Table 3 に示すようになった。その結果、いずれの血液型に対するイメージも、回答者の血液型による差はみられなかった。

## 血液型ステレオタイプの肯定・否定理由

血液型ステレオタイプを肯定・否定する理由を表わす項目について因子分析（主成分分解・Varimax 回転）を行った結果、固有値1.0以上の基準を満たす4因子が抽出された（Table 4）。第1因子に負荷量が高かったのは「血液型性格判断は科学的だと思う」「血液中の成分が異なれば、性格にも影響を与えるはずだ」「血液型性格判断は雑誌によく載っているのが本当だと思う」の3項目であった。これらは、血液型ステレオタイプの妥当性を論理的に肯定する内容の項目であり、第1因子は「論理的肯定」と命名された。第2因子に負荷量が高かったのは「自分の周りの人は血液型性格判断の結果がよくあてはまる」「他人の血液型がなんとなくわかる」「自分と同じ血液型の人は、自分と性格が似ている」の3項目であった。これらは、自分の経験を根拠にして血液型ステレオタイプを肯定する項目であり、第2因子は「経験的否定」と名付けられた。第3因子は、「性格は血液型よりも環境によって作られると思う」「人の性格は血液型による4タイプには分けられないと思う」「人の性格は血液型で判断できるほど単純ではない」の3項目に負荷量が高かった。この3項目は、論理的な推理に基づき血液型ステレオタイプの妥当性を否定する項目であり、第3因子は「論理的否定」と命名された。最後の第4因子は、「同じ血液型でも違う性格の人がいる」「自分の身の周りには血液型性格判断のあてはまらない人がいる」「血液型性格判断の内容は自分にはあてはまらない」の3項目に負荷量が高かった。これらは自分の経験を根拠にして血液型ステレオタイプを否定するものであり、「経験的否定」と命名された。これらの因子構造は上瀬ら（1991）と一致しており、血液型ステレオタイプを肯定・否定する理由は、いずれも論理・経験に基づく2タイプに分類されることが確認された。また、この4因子による累積寄与率は67%であった。

次いで、各項目の回答の「そう思う」「ややそう思う」を併せて“肯定率”とし、4つの側面別にその割合を比較した。その結果、「性格は血液型よりも環境によって作られると思う」（93%）など論理的否定に関する項目の肯



Table 4 血液型ステレオタイプを肯定・否定する理由の因子分析 (バリマックス回転後の負荷量)

変数名	肯定率 (%) *1	論理的肯定	経験的肯定	論理的否定	経験的否定
血液型性格判断は科学的だと思う	11.6	○-0.826	-0.130	-0.133	-0.177
血液中の成分が異なれば性格にも影響を与えるはずだ	26.4	○-0.796	-0.253	0.057	-0.078
血液型性格判断は雑誌によく載っているので本当だと思う	15.3	○-0.759	-0.298	-0.132	-0.072
自分の周りの人は血液型性格判断の結果がよくあてはまる	54.4	-0.329	○-0.771	-0.186	-0.055
他人の血液型がなんとなくわかる	55.3	-0.248	○-0.738	-0.191	0.106
自分と同じ血液型の人は、自分と性格が似ている	45.9	-0.243	○-0.694	-0.031	-0.311
性格は血液型よりも環境によって作られると思う	93.1	0.154	0.072	○0.578	0.303
人の性格は血液型による4タイプには分けられないと思う	93.1	0.005	0.151	○0.861	0.037
人の性格は血液型で判断できるほど単純ではない	92.5	0.124	0.073	○0.790	0.185
同じ血液型でも違う性格の人がいる	98.1	0.234	-0.090	0.207	○0.753
自分の身の周りには血液型性格判断のあてはまらない人がいる	78.3	0.152	0.151	0.326	○0.693
血液型性格判断の内容は自分にはあてはまらない	21.3	-0.050	0.455	-0.177	○0.589
寄与率 (%)		18.7	17.2	16.6	14.0

注: \*1 肯定率は、その項目に「そう思う」「ややそう思う」と回答した者の割合。  
○印の付いた因子の尺度項目とした。

定率が総じて多かった。また経験的否定についても、「同じ血液型でも違う性格の人がいる」が98%であるなど肯定率が高めであった。論理的・経験的いずれの側面においても否定的理由づけの肯定率が高かったことから、多くの回答者は血液型ステレオタイプを否定する情報をもっていることが示された。

しかし、「他人の血液型がなんとなくわかる」(55%)など経験的肯定項目の肯定率も5割前後に達していた。

## [考察]

### 1. 血液型ステレオタイプの利用のされ方

本研究の第1の目的は、血液型ステレオタイプがどのような用いられ方をしているのか、またどのような機能をもっているのかを確認することにあった。

ステレオタイプへの態度項目を全体として因子分析したところ、「信念強度」「娯楽」「関係促進」「行動調整」の4因子が抽出された。このうち「娯楽」「関係促進」は、血液型ステレオタイプの機能に関する認知を示すものと考えられる。この点から、血液型ステレオタイプは、楽しい「娯楽」として、また他者を理解したり初対面での話題として用いるなど、他者との「関係促進」の手段として用いられていることが明らかとなった。特に、「娯楽」因子に負荷量の高い項目の肯定率は5割以上に達し、女子大学生にとって血液型ステレオタイプの維持には、娯楽的要素が強く関連していることが確認された。ただし、「関係促進」としての使いかたも2~5割近くに達し、かなりの割合で利用されていた。

また、差別的な行動につながるとして懸念された、血液型ステレオタイプに基づく対人行動についても、因子分析の結果「行動調整」因子として抽出された。しかし、この因子に負荷量の高い項目の肯定率をみるといずれも1割程度と低く、「娯楽」「関係促進」としての利用に比べてあまり行

われていなかった。この点から、回答者は血液型ステレオタイプを楽しみ、話題のひとつとして、あるいは他者理解の手段として用いているものの、全面的にステレオタイプに頼った行動を起こす場合は少ないことが明らかに示された。

## 2. 各血液型のイメージ

本研究の第2の目的は、各血液型についてどのようなイメージが構成されているのかを確認することにあった。双対尺度法を用いて各血液型のイメージを検討したところ、全体としては4つの血液型によって、性格特性が異なって捉えられていることが示された。さらに、各血液型のイメージは、いくつかの特性が中心となって形成されていることが示された。中心となる特性は、A型では例えば「感情や欲求を抑える」、B型では「人に縛られるのが嫌い」、O型は「人への対応はニコヤカ」、AB型は「安定的な面と不安定な面がハッキリ分かれている」などである。ただし、分析に用いた特性が明確に4つに分類されてはおらず、「周囲の影響は受けにくい」がB型とAB型の中間に位置するなど、2つの血液型に共通してイメージされている項目もいくつか存在している。これらの点から、各血液型のイメージには、中心となる特性が存在し、それに辞書的に項目が付随することにより形成されているものと推定される。

また、4つの血液型に対するイメージの構造全体をみると、A型とB型が、O型とAB型がそれぞれ対極にあり、坂元(1991)の指摘した構造と一致している。またイメージの内容からも、坂元の内向-外向・協調性-非協調性という軸による分類の妥当性が示唆されている。例えばA型のイメージの中心になっていた「周囲の人に気をつかう」「感情や欲求をおさえる方である」という特性項目は、「内向的で協調的」な内容をもつものと考えられる。また、同様にO型の、「人への対応はニコヤカでソツがない」「人に心を開く」の項目も、「外向的で協調的」な内容といえる。B型とAB型についてはA型やO型ほど明確ではないが、B型の「人に縛られるの

が嫌い」は非協調的な側面を、またAB型の「人とのつきあいに距離をおいている」は内向的な側面をそれぞれイメージしたものと考えられる。

本研究ではその他に、能見の記述と現在もたれている血液型イメージとの比較も行った。その結果、各血液型と項目のつながりについては、血液型ブームの創始者である能見の記述とはやや異なる部分があった。この結果は、現在の血液型ステレオタイプは既に能見の記述とは異なった方向に内容が形成されていることを示しており、佐藤・渡邊（1992）らの指摘を裏付ける結果となっている。

### 3. 各血液型に対する否定的感情

本研究の第3の目的は、血液型ステレオタイプを感情側面からも検討することにあつた。各血液型に対する否定的感情に関する回答をみると、総じてO型に対する好意的イメージが強く、AB型に対する否定的イメージが強い傾向がみられる。特にAB型が、「隣には住みたくないタイプ」「結婚したくないタイプ」として、2割もの回答者に挙げられていたことは、社会的問題としても注目される。

何故AB型が否定的感情をもたれやすいかについては、2つの説明が考えられる。第1に、前述のイメージ分析において、AB型の中心特性として考えられていたのは「人との付き合いに距離をおく」「情緒の安定・不安定が分かれている」など、否定的な意味合いの強い項目であった。この点から、AB型の特性として考えられている内容そのものに、否定的な感情を喚起する要因が含まれていると考えられる。第2に、ステレオタイプ研究の中で、これまで多く指摘されてきた「誤った関連づけ (illusory correlation)」現象が、血液型ステレオタイプにも当てはまる可能性がある。これまでの研究では、少数派が何か目だつ行動（例えば非社会的行動）を起こした場合、多数派が同様の行動をした時と比べて、目だちやすく、特徴的な行動として認知されやすいことが指摘されている。AB型は、日本人全体の中では1割に過ぎず、他の血液型と対して少数派に当たる。従って、

集団の中でネガティブな行動を起こした場合に、他の血液型の人物が同じ行動を起こした時と比較して、悪い印象が形成されやすく、A B型に否定的感情が伴いやすいことが推測される。ただし、これらの説明に関しては、さらに詳しい分析が必要であろう。

本研究は、従来は認知的側面を中心に分析されてきたステレオタイプの問題を、感情的側面も含めて検討した点で有効なものと位置づけられる。ただし、血液型ステレオタイプ全体の構造において、認知的側面と感情的側面がどのように関連しているのかを、引き続き検討していく必要が残されている。

#### 4. 理由づけ

本研究の第4の目的は、血液型ステレオタイプを肯定・否定する理由として、“経験的理由”“論理的理由”があることを確認することにあった。

血液型ステレオタイプを肯定・否定する理由に関する回答を因子分析した結果、「経験的肯定」「経験的否定」「論理的肯定」「論理的否定」の4因子が抽出された。この点から、血液型ステレオタイプの肯定・否定理由には、それぞれ経験的理由と論理的理由があることが確認された。

また、各理由づけに対する肯定率の高さから、回答者の多くは血液型ステレオタイプを否定する論理的・経験的理由づけを保持しているにもかかわらず、ステレオタイプを肯定する経験的根拠も多く持っていることが明らかとなった。この点から、“他人の血液型が当たった”“自分と同じ血液型の人が自分と似た性格をしていた”といった自らの経験が、血液型ステレオタイプを維持させる要因になっていることが推測される。今後は、理由づけが認知や感情側面に与える影響についても、分析を進める必要が残されている。

#### 5. 本研究の意義と今後の課題

これまで血液型ステレオタイプの機能や社会的偏見との関連については

様々に推測されてきたが、本研究結果は、これを数量的に実証した点で意義のあるものといえる。本研究では女子大学生を対象として調査を行ったが、その中では血液型は娯楽として楽しまれており、行動指針として利用する者は少ないことが確認された。またステレオタイプを肯定・否定する理由においても、回答者の多くはこれを否定する論理的根拠を多く持っていることが明らかとなった。ただし、各血液型に対する態度を感情面から分析すると、AB型に対して否定的感情を持つものが少なくないことが指摘され、回答者自身の認知面と感情面のギャップが示唆されている。このような本研究結果は、血液型ステレオタイプが単なる遊びとして片付けられないことを示すと同時に、ステレオタイプ研究においては認知面と同様に感情面からのアプローチも必要であることを示すものと位置づけられる。しかし、認知面と感情面はどのように関連しているのか、また多くの人が娯楽的利用にとどまる一方で、なぜ特定の者は血液型を行動指針として用いるのかなどについては、本研究では明らかにされていない。従って、ステレオタイプの各側面の関連についてさらに分析を行う必要がある。

一方、本研究は血液型ステレオタイプの内容を数量的に検討し、ブームの創始者である能見の記述との差を示した点で有効であったと考えられる。ただし本研究では、能見の記述をもとに作成した項目を使用しているために、中心となる特性が現在のイメージ全体に果たす役割については十分な検討が行われていない。今後は、他の特性も加え引続き検討を行うことが求められる。

#### 引用文献

- 池田謙一・村田光二 1991 ころと社会 東京大学出版会  
梅村隆之 1990 ここまで来た「血液型狂時代」 週刊朝日 1990年12月14日号、  
Pp. 28-30.  
大村政男 1990 血液型と性格 福村出版  
上瀬由美子・松井豊・古沢照之 1991 血液型ステレオタイプの形成と解消に関する研究 立川短期大学紀要, 24, Pp.55-65.  
上瀬由美子・松井豊 1991 血液型ステレオタイプの機能と感情的側面 日本社

- 会心理学会第32回大会発表論文集, Pp.296-299.
- 坂元章 1988 対人認知様式の個人差とA B O式血液型性格判断に関する信念  
日本社会心理学会第29回大会発表論文集, Pp.52-53.
- 坂元章 1991 血液型ステレオタイプの構造と知覚の歪み 日本社会心理学会第  
32回大会発表論文集, Pp.292-295.
- 佐藤達哉・渡邊芳之 1992 心理学評論, 35, Pp.234-268.
- 白佐俊憲・井口拓自 1993 血液型性格研究入門 川島書店
- 渋谷昌三 1985 態度 三井宏(編) 社会心理学 小林出版 Pp.62-78.
- 総理府内閣総理大臣官房広報室(編) 1987 昭和61年版世論調査年鑑 大蔵省印  
刷局
- 詫摩武俊・松井豊 1985 血液型ステレオタイプについて 東京都立大学人文学  
部人文学報, 172, Pp.15-30.
- 能見正比古 1971 血液型でわかる相性 青春出版社
- 古川竹二 1927 血液型による気質の研究 心理学研究, 2, Pp.612-634.
- 松井豊(編) 1992 対人心理学の最前線 サイエンス社
- 松井豊 1991 血液型による性格の相違に関する統計的検討 立川短期大学紀  
要, 24, Pp.51-54.
- 松井豊・上瀬由美子 1991 血液型ステレオタイプの認知的側面と感情的側面  
日本グループダイナミクス学会第39回発表論文集, Pp.107-108.
- Bogardus, E. S. 1925 Measuring social distances. *Journal of applicational Sociol-*  
*ogy*, 9, In Fishbein, M. (ed.) 1967 Readings in attitude theory and measure-  
ment. John Wiley & Sons. 但し渋谷(1985)より引用.

## 注

- 1) 本研究の一部は日本社会心理学会第32回大会(上瀬・松井, 1991), 日本グループダイナミクス学会第39回大会(松井・上瀬, 1991), および「対人心理学の最前線」(松井(編), 1992)で発表されている。本論文は上瀬が主に執筆した。
- 2) 本学文学部人間関係研究室
- 3) 東京女子大学現代文化学部